

症 例

食欲低下、意欲減退のある入所者に関わって ～本人の嗜好を取り入れて～

介護老人保健施設 なでしこ、介護職¹⁾ 看護職²⁾

田海 理恵¹⁾、中村 由夏¹⁾、本間 由香¹⁾、室山 敏恵¹⁾
森 まゆみ²⁾

近年の高齢社会は家庭介護力の低下に伴い施設入所希望者が増加している。入所による環境の変化に伴って食事摂取量が減少することにより、褥瘡等さまざまな弊害がおこってくる。入所以前からの習慣である「飲酒」を毎日取り入れることにより、食欲増進し、褥瘡が治癒するなどの良好な結果が得られた。以前からの習慣や楽しみを施設生活に取り入れることは生き生きと過ごすことに有効である。

キーワード：食欲低下 飲酒 食事摂取量の増加

食事自力摂取可
車椅子移動全介助

IV. 入所までの経過

以前から、在宅介護と施設の入退所を繰り返していた。主介護者である長女が入院してからは、長女の体力が回復するまで他施設を転々としており、今回、家族の希望で当施設に入所となる。その後は家族からこの先、在宅では看られないと申し出があったため、転院先を探すこととなる。

I. はじめに

私達の体にとって食事とは睡眠や排泄と同様に生命の維持や健康保持増進に不可欠である。また人生の楽しみ、生きる意欲にもつながる。現代は高齢社会であり、老人保健施設等の利用も多い。高齢者が施設に入所したとき、環境の変化、病状の進行、不安等により食欲の減退を招くことがあり、生命の維持への危機、QOLの低下をまねく事につながりやすい。

今回、意欲低下があり食事摂取量の減少に伴う体重減少、褥瘡形成のある事例を担当した。食事摂取量増加を目指し、ケースカンファレンスを実施し、本人の嗜好である飲酒を取り入れたところ、表情も明るくなり、食欲が増進し、褥瘡の治癒、体重減少の停止につながったのでここに報告する。

II. 研究期間

平成15年8月19日から11月1日

III. 事例紹介

1. 氏名 K氏
2. 年齢 76歳
3. 病名 パーキンソン病、多発性脳梗塞、てんかん
4. 職業 60歳まで会社員、その後72歳まで土木作業員
5. 介護度 要介護度4
6. ADL ポータブルトイレに全介助で移動
紙パンツ内に失禁が多く、
紙オムツ貼用となる

V. 入所してからの経過

8月19日入所。入所当初は、家族からの情報によると、食事にむらがあり副食はあまり食べない。また、本人が「いらぬ」といえば下膳しても良いとのことだった。とりえず常食、軟菜キザミとし、自宅と同じふりかけをまぶしたおにぎりを用意した。それを何とか自分の手でつまんで食べてはいたが、「中のほうに味がしない」と、不満が聞かれた。副食は1～2口くらいで「いらぬ」と言うときもあれば、半分くらい摂取できるときもあった。

8月26日頃から徐々に食欲低下が強くなり飲み込むのに時間がかかるようになった。8月28日おにぎりの米粒を喉に詰まらせるということがあり、食事にトロミをつけたが口の中のためこんでしまうためミキサー食に変更した。しかし、「味が無い、甘くて食べられない」と食事摂取量がさらに減少した。

入所してから2週間で2キロの体重減少と仙骨部に褥瘡の形成がみられ栄養状態の改善が必要であり、本人に何か希望のものが無いかと尋ねたところ「酒」と答え、酒を飲む仕草が見られた。

VI. 介護計画

1. 生活全般の解決すべき課題
食欲減退のため栄養不足になる可能性がある。
2. 長期目標
栄養状態が保てる
3. 短期目標
毎食時、主食、副食ともに5割以上摂取できる。
褥瘡が治癒する。

4. 行動計画

- 1) 食事形態と補助食品の検討
主食全粥、副食ミキサー食。味噌汁は具なしとし、練り梅とともに毎食つける。
エンシュア、L6、リカバリーを試す。
- 2) 食事介助
初めは自力摂取してもらい、5割以上摂取できないときには介助する。夕食は16時30分からは、他入所者が終了する時間までゆっくり摂取してもらう。
- 3) 嗜好品の情報収集と実施
夕食前に日本酒30cc飲酒する。
- 4) 体重測定
週一回の体重測定 11時
- 5) 褥瘡の観察
オムツ交換時、入浴時は皮膚の観察をする。
仙骨部の褥瘡はテガダームで保護し、入浴時に交換する。
- 6) 口腔ケア
毎食後ハブラシでブラッシングを行う。

Ⅶ. 結 果

1. 飲酒を開始してから、徐々に主食茶碗2杯、副食全量を食べられるようになった。本人より「こんなに食べられるようになった」と、喜ぶ会話が何回も聞かれるようになった。また、それまでは甘いのは嫌だと拒否的だった栄養補助食品も、量が少なく味が色々あるリカバリー（125ml、200kcal、きなこと味）を1日1本飲むようになった。
2. 最初は自力で食べていたものの、徐々に困難になった。しかし、食べたいという意欲はあり、介助にて全量摂取できた。
3. 飲酒を開始してから食事摂取量が増加した。それとともに、選挙期間であったため不在者投票の希望を聞くと、自分は選挙カーに乗っていたこともあり、ぜひ不在者投票をしたいとの希望があった。そして、施設内の入所者で唯一不在者投票をするという意欲向上が見られた。
4. 入所後2週間で2キロの体重減少があったが、その後はさらに減少することはなかった。しかし増加は認められなかった。
5. 食事摂取量が増加してからは治療できた。
6. K氏は自分の歯で、本人は、元気な時は、「歯磨きの習慣が無かった」とのことで拒否的であったが、促すとブラッシングに応じてくれた。1日3回が目標であったが1日1～2回しか行えない日が多かった。そのような時は含嗽のみ行った。

Ⅷ. 考 察

食事摂取が困難になったとき、原因または要因は本人側と介護者側の2つに分けられる。その中でもK氏の場合は、機能低下、環境、心理的な問題と本人側の要因が大きいと考えられる。

松月は機能低下に関して口腔機能の維持、食事の形態や粘性の調節で摂取が可能になる¹⁾と述べているように、毎食後のブラッシング、含嗽、ミキサー食にト

ロミアップ等の使用により嚥下がしやすく摂取量が増加したといえる。

また、K氏は施設入所を繰り返しており、在宅の希望はもてないこと等による気力の低下がみられた。そのため、本人の心理状態の改善へのアプローチとして本人の希望を取り入れ、晩酌時には、本人には「おいしそうですね」等の言葉がけを行いながら気分良く飲酒できる環境を心がけた。飲酒開始後には食事摂取量が増加していった事から、嗜好は食欲よりも一層、心理的影響が強いと言われている、心理状態、環境の変化による食欲の減退の改善に効果的であったと考える。

酒は「百薬の長」といわれているように、禁酒や大量飲酒をするものに比べ、小、中量の飲酒の方が死亡率が低いことを10年間の統計で実証されている適量飲酒によるU字曲線というデータがある。さらに、日本酒には、体に有効な機能成分が数多くあり、これらが病気に効果を発揮することが研究でわかっている。その中に、抗パーキンソン病、抗うつ病、精神安定効果が証明されている。これらがK氏の食欲アップ、意欲向上に関与したと考える。

飲酒には自分から積極的に「飲みたい」と意思表示しただけに喜んだ顔を見せていた。施設は病院と違い生活の場であり、今までの生活で飲酒の習慣があれば、それを取り入れるという事が生活の張りにつながっていく、食べる意欲、生きる意欲につながったケースであると考えられる。

当施設では入所時に飲酒の習慣の有無と施設内で飲酒しても良いかという許可を家族に訊ねている。許可がある入所者には行事などの機会にビール、日本酒、梅酒などが供される。飲酒に加わる入所者は数名であるが実に楽しそうに酒を酌み交わしている。病院と違い生活の場である施設内ではレクリエーションなど楽しむ機会を持つようにしているが晩酌という毎日の習慣、かつ楽しみを取り入れることも入所者にとっての生きる張り合いになっていくのではないかと考える。

Ⅸ. ま と め

当施設は、ADLの向上、在宅生活への復帰が目的であるが、実際は家族介護力の不足のため、次の施設待ちの入所者が多い。また、医療行為は原則として出来ないため、経口摂取が出来なくなれば入院となるわけだが、付き添いなどの関係上、困るといふ家族も多い。このような家族の希望を受け入れ、ぎりぎりまで医療に頼らず施設内で生活していけるよう援助していかなければならない。看護、介護の専門職としての役割を果たす事は勿論だが、生活に目を向けて、入所者が1人の人間として楽しく生きていけるよう援助することも大切にしていきたい。

Ⅹ. 引用文献

- 1) 松月弘恵：たべられなくなったときにどうするか、訪問看護と介護Vol.4 No.12 p.941～946, 1999.

XI. 参考文献

- 1) 藤谷順子：これならできそう嚙下りハ. Expert Nurse 7月号 p 33~71, 2003.
- 2) 社団法人アルコール健康医学協会ホームページ：
お酒を飲むとなぜ楽しくなるのか。
NEWS&REPOORT Vol.8 No.3, 2002年11月発行分.
- 3) 西山悦子：介護を支える知識と技術. 中央法規出版 p 24~27, 2003

Itoigawa General Hospital, Nursing-healthcare facility for the elderly "Nadesiko", Nurse
Ri-e Toumi, Yuka Nakamura, Yuka Honnma, Toshie Muroyama, Mayumi Mori

As for the recent aged society, applicants of nursing in facility have increased with a fall of home-care power. Because a dietary intake decreases with an environmental change after a hospitalization, many problems like bedsores may occur. We experienced a case that increased his appetite by taking his drinking custom and, furthermore, his bed sore was healed. It is effective for a facility life to take patient's custom.

Support of a patient with loss of appetite and willingness with his taste in our nursing-healthcare facility for the elderly

Keyword : appetite loss, drinking, increased dietary intake

食 事 摂 取 状 況

	食 事	補助食品	コ メ ン ト
8/19	7/7	×	入所： 食事形態は、主食おにぎり2ヶ、副食キザミ。
8/20	5/1	×	夏祭りの為、昼食笹寿司2ヶ、焼きそば1口、スイカ、なすの煮物を摂取する。本人希望にて、盃1杯お酒を飲む。
8/23	4/1	×	夕食時、手でお酒を飲む仕草をして、「こっちのほうがいい」と言う。
8/26	5/1	×	昼食時、おにぎり1ヶ摂取後、ムせてしまい「もういらん」と言う。
8/28	6/1	×	昼食時、おにぎりの米粒を誤嚥のため吸引施行する。主食粥、副食ミキサーに食事変更する。
8/31	10/1	×	昼食時、粥のみで副食に手をつけず、本人に聞くと「おじやでもいい」とのことで、食事変更し、主食おじやにする。
9/3	10/1	×	おじやの拒否あり。補食の粥は食べている為、主食を粥に食事変更する。
9/4	7/みそ汁	×	昼食主食のみ摂取、副食介助するも手ではらいのけ、水分摂取拒否あり。何か飲みたいか聞くと「酒」と答え、甘いものはダメとのこと。
9/8	10/1	×	主食に練り梅を載せると、スムーズに摂取する。塩味の強い食物を好む。
9/10	10/0	×	みそ汁飲むが、ミキサー食の為ドロドロしていてすぐにやめてしまう。夕食より具無しのみそ汁に3食練り梅をつける。
9/26	10/0	×	食事が進まない事について、カンファレンスで検討。本人の嗜好を考慮し、酒（日本酒30ml）を晩酌として開始。
9/29	10/みそ汁	×	夕食時、本人より「うまい」と言葉あり
9/30	10/みそ汁	×	みそ汁のお椀を出し「コレないんか」と、おかわりを催促。
10/1	2杯/10	×	朝食より、粥のおかわりの希望あり。補食の粥を摂取する。
10/5	2杯/2	×	昼食時、ムセ込みあり、吸引施行する。吸引後「ご飯食べる」と言う。
10/7	2杯/0	○	リカバリー（きな粉味）開始。お粥2杯、毎食みそ汁、練り梅2本ずつ栄養科に依頼。
10/10	2杯/2	○	昼食時、スプーンを持つ手が口まで行かず、「口に入らん」と言う。介助にて摂取できる。
10/15	2杯/8	○	昼食時、お粥の茶碗が持てず、置いたまま摂取する。
10/17	2杯/5	○	朝食時、本人より「うまい、こんなに食べられるようになった」と言う。
10/21	2杯/9	○	離床する際、「ご飯いっぱい食べるよ」と意欲的な言葉が聞かれる。
10/26	2杯/10	○	昼食時、お粥でムセ込むが、落ち着いてから食べはじめ、「うまい、ありがとうね」と言う。
11/11	2杯/5	○	退所となる